

Basic Encounter Groupsへの参加による Irrational Beliefsと自己受容の変化(臨床 心理学専攻, 修士論文要旨(2005年度修了者))

高瀬, 健一

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

285

(終了ページ / End Page)

286

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020757>

<臨床心理学専攻>

幼児期における問題行動とバウム・テストの描画特質に関する研究 —Child Behavior Checklistプロフィールとの関係性を通して—

島田 藍

近年、子どもたちの不適応に関する問題が社会でも大きな話題となっている。子どもたちは内面にある感情をうまく言語化することができないので、その子なりのサインでそれを表現している場合が多い。彼らのサインに気づいて早期に対応できれば、ネガティブな問題の連鎖を防ぐことができるのではないだろうか。バウム・テストはその簡便性ゆえに子どもを対象としたパーソナリティ検査に用いられやすく、施行の際に生じる抵抗も小さいというメリットをもつ。また、ことばによって内面を語るのが困難な幼児にとって、こころの深い部分を投影するバウムの果たす役割は大きい。しかし、幼児を対象としたバウム・テストの臨床的研究はまだあまり行われていない。本研究では、CBCL(4-18歳用)を用いて幼児のメンタルヘルスの状態とバウムとの関連を調べ、どのような状態にある子どもがどのようなバウムを描くのかを明らかにすることを目的とした。

第1研究では、幼児における全体的な発達およびメンタルヘルスの状態の把握に焦点を当てた。1) 過去と現在、2) 幼稚園児と保育園児、3) 不適応児と適応児、4) 不適応状態の下位分類ごとの群比較を目的とし、各群におけるバウム指標の出現率について χ^2 検定を行い、それぞれの子どもたちがバウム・テストにおいて表現する描画の特徴について概観した。そして、第2研究では不適応状態にある子どもたちひとりひとりに目を向け、CBCL(4-18歳用)、乳幼児精神発達診断法、バウム・テスト、およびP-Fスタディを用いて、バウムからみるこころの動きを中心に、彼らについて多面的に理解することを試みた。

その結果、数十年前に比べて現代における子どもたちの全体的な精神的健康度の弱まりが示唆され、幼稚園では同年代の子どもたちはほぼ同一の発達状態にあるのに対し、保育園では発達が著しく未熟な子どもや同年代の幼稚園児の平均的な発達レベルを明らかに上回る子どもも存在し、その状態にかなりの個人差があることがわかった。このような現状の中で、バウム・テストにみられる不適応状態のサインは、主に幹および枝の描画特徴にあらわれることが明らかになった。不適応児の描くバウムは、幹においては幼児型、細い幹が多くみられ、これらは自我の萎縮や精神的エネルギーの弱さをあらわしている。枝においては枝描写なし、刀型枝が多く、環境と接する能力が乏しいことや、その接し方に偏り、歪みのある状態を示しており、全体的な未熟さも読み取ることができた。CBCL(4-18歳用)のように顕在化している問題行動を拾うテストは記入や点数化に時間を要すものが多いが、短時間で遊び感覚でできるバウム・テストの解釈とCBCL(4-18歳用)の結果はほぼ一致しており、CBCL(4-18歳用)にみられた不適応状態は、バウムからも読み取ることが可能であるといえる。

また、ひとりひとりについて理解する場合は他の側面から対象児をみるためにテスト・バッテリーを組むことも大切で、特に、顕在化している問題をCBCL(4-18歳用)でひろい、その不適応行動を生み出しているこころの動きをバウム・テストからみていくことは、対象児の介入の際に有効な情報を得るのに役立つ。そして、バウム・テストは不適応行動が顕在化していない子どもの内面にある不安や衝動などをみるのにも有効であることが明らかになった。バウム・テストの実施は、こころに何らかの問題や葛藤を抱える子どもたちを見つけ出し、早期に対応するための一手段として有効であると考えられる。

<臨床心理学専攻>

Basic Encounter Groupsへの参加によるIrrational Beliefsと自己受容の変化

高瀬 健一

<問題と調査目的>

Basic encounter groups(以下BEG)とは、Rogers.C(1970)らによって始められた、参加者の心理的成長と対人関係におけるコミュニケーションの改善に焦点をあてた集中的グループ体験である。通常1~2名のファシリテーターと10~15名のメンバーで構成され、2~3泊の宿泊形式で行われる。特に決められたテーマはなく何を話すかはメンバーに任されている。BEGにおいては、自己や他者との関係が変化することが明らかとなっているが、その要因は明らかとは言えない。その点に関して、筆者はこの過程に自己・他者に関するこり固まった考え方が減少してゆくという認知レベルでの変化するかわちイラショナルビリーフの低下を伴っているのではないかと考えた。イラショナルビリーフとは絶対的・独断的な性質を持ち、「~ねばならない」「~すべきである」などの形で表されるあるべき姿を絶対視する信念である(Ellis&Dryden,1955)。

B.E.G.参加者の自己受容とイラショナルビリーフがどのように変化するかを、質問紙法を用いた調査により量的に捉えるとともに、参加者への面接とその質的分析を通してその様相を明らかにすることを本研究の目的とする。質問紙法を用いた量的調査を第1研究とし、参加者への面接とその質的分析を第2研究とする。

<第1研究—質問紙法による調査>

方法：平成17年2月から8月までに行われた3泊4日のBEGの8グループ58人について調査を行った。自己受容尺度SAI(宮沢,1988)および日本版不合理な信念測定尺度JIBT(松村1991)を含めた調査票を合宿の初日のオリエンテーション時に配布して記入を求め、これを参加前のデータとした。また、最終日の集合時に再度調査票を配布して記入を求め、これを参加後のデータとした。

結果：BEGへの参加前に比べて、参加後にはJIBTの合計点は有意に低かった。参加後に有意な低下が見られた下位尺度は問題回避、倫理的非難であった。BEGへの参加前と参加後でSAI合計得点に有意な差は見られなかった。JIBTおよびSAIの合計得点および下位尺度得点の変化量の相関について検討した結果、両尺度の合計得点変化量の間に有意な負の相関が見られたほか、JIBTの下位尺度の中で、自己期待、問題回避、外的無力感などの変化量がSAI合計得点および多数のSAI下位尺度と有意な負の相関を示した。

考察：BEGへの参加前に比べて、参加後には参加者のJIBT合計得点に有意な低下が見られ、BEGへの参加によって参加者のIrrational beliefsが減少することが示された。自己受容には変化はみられなかったと言える。しかしながら、変化量の絶

対値をとるとM=4.60 SD=4.660であり、個人レベルではSAIの変化が起きていないのではなく、上昇する参加者もいれば(34名)逆に低下する参加者もいる(24名)ことが、平均として変化のない原因であると考えられた。

<第2研究一面接法による調査>

方法：BEGの参加前後に質問紙調査を実施してJIBTが10ポイント以上の変化を示した参加者を9名を選びインタビューを実施した。質問項目：1) 今回のBEGに参加してこのような考え方に変化があったと思いますか？ 2) それはどのような場面、やり取り、要因によって起きたと思いますか？ 3) それによって気持ちの変化、その後の生活上の変化はありましたか？

<総合考察>

今回の研究から抽出されたBEGにおいてIrrational beliefsの変化および自己受容に重要な影響を持つと思われる要因として、共有する体験、他者からの受容、内的体験への直接関与とその言語化、価値観の多様性に開かれること、が抽出された。

<臨床心理学専攻>

大学生における両親の養育態度とパーソナリティ・タイプ

古谷千絵

本研究は、両親の養育態度が大学生のパーソナリティの、内向性・外向性と神経症傾向の間にどのような関係があるかを研究する。さらに、パーソナリティに対して、両親の性別の違いが、子どもの性別によって異なる影響をもたらすかを検討することを目的とした。研究対象は、私立の福祉系学部大学生156名(平均年齢20.06歳)であり、質問紙によって、内向性・外向性と、神経症傾向のパーソナリティと、認識される両親の愛情、干渉の養育態度について父親、母親を分けて測定した。

まず、対象者の内向・外向性と、神経症傾向を、モーズレイ性格検査(Eysenck, 1959)で測定した結果、内向・外向性と神経症傾向のどちらにおいても男女の差は見出されなかった。さらに、両親から受けた養育については、PBI日本版(Parker, 1979)で測定した結果、男女の差は見出されなかったものの、母親の養育態度が父親の養育態度に比べ愛情、干渉ともに高い結果であった。これらの結果は、原本による報告と同様の結果であった。

外向性についての検討では、父親から愛されていたと認識している者では外向性が高くなり、父親が過干渉であったと認識している場合には、子どもの外向性は低くなる。特に、男性では母親の愛情を認識し、父親の干渉を認識しなかった場合に、女性では、父親の愛情が認識される場合に、社会的なパーソナリティを発達させ得ると考えられる。愛情に関しては異性の、干渉に関しては、男性でのみ同性の親の影響が強いことが窺われた。

愛情の認識と神経症傾向では、両親に愛されていたと認識している場合で、神経症傾向が低い。特に男性では母親の愛情を認識していないことと、両親の過干渉を認識していること、女性では父親が過干渉であると認識していることが、その神経症傾向を強めていた。そして、両親の養育スタイルとして、総合的にこれをみた場合、特に男性において父親が「至適な養育」をしていなかったと思うときに、神経症傾向が伴われていた。また、男性では両親の影響を精神的な安定に反映させやすいことが認められたが、女性の神経症傾向では両親の養育スタイルによる影響はみられなかった。これは、今回の研究における方法論の限界によると考えられ、これを克服することが今後の研究課題である。

今回の研究では、外向性と神経症傾向について、両親についてどのように認識しているのかを対象としたものであった。しかしながら、青年期までの発達の中で両親以外の家族や友人、恋人や先生などの、両親以外の重要な他者の存在は、影響力を持つと考えられる。今後の研究においては、それらの対象の有無や、対象に抱く認識がパーソナリティによって異なるのかを検討することも、青年期のパーソナリティを理解する上で必要だろう。